

日本学校教育相談学会

THE JAPANESE ASSOCIATION OF SCHOOL COUNSELING AND GUIDANCE

栃木支部会報 2006.09.20

NO.5

○平成18年度日本学校教育相談学会栃木支部総会

○記念講演 演題 「アメリカスクールカウンセラー事情」

Carolyn Stone 先生、Carol A. Dahir 先生、瀬戸 敦子 先生

○日本学校教育相談学会第7回夏季ワークショップ

「学校で生かす認知行動療法」に参加して

齋藤 誠一郎 先生 (作新学院高等学校)

○埼玉大会レポート

「第18回総会・研究大会(埼玉大会)」に参加して

藤浪 直紀 先生 (作新学院高等学校)

○2006.8.6 学校教育相談学会第18回埼玉県大会 研究・事例発表D分科会

「メール相談を取り入れた学校教育相談の一事例」

作新学院高等学校情報科学部 藤浪直紀先生の発表を拝見・拝聴して

佐藤 幹雄 先生 (海星女子学院)

○「栃木県支部事務局から」

谷津 嘉子 さん (栃木支部事務局)

○栃木支部よりのお知らせ

○栃木支部事業計画

○ 平成18年度日本学校教育相談学会栃木支部総会

平成18年度

日本学校教育相談学会栃木支部総会と記念講演

記 念 講 演

演 題 「アメリカスクールカウンセラー事情」

講 師

Carolyn Stone 先生

Carol A. Dahir 先生

瀬戸 敦子 先生

支 部 理 事 長 丸山 隆

理 事 池田 清恵 伊澤 裕
小川 正人 金子 賢
川俣 幸雄 柴 一弥
原田 浩司 日野 宜千
藤浪 直紀 毎澤 典子
監 事 笠原 光雄 長橋恵美子

新役員

新 監 事

(平成18年度栃木支部総会にて選出)

齋藤 誠一郎 (作新学院高等学校)

平成18年6月3日(土)に教育会館5階小ホールにおいて平成18年度日本学校教育相談学会栃木支部の総会と記念講演が行なわれました。

議 事

- (1) 平成17年度事業報告
- (2) 平成17年度決算報告
- (3) 「会計監査」報告
- (4) 平成18年度事業計画案審議
- (5) 平成18年度予算案審議
- (6) 役員選出
- (7) その他

支部役員



○ 記念講演

演題 「アメリカスクールカウンセラー事情」

講師 Carolyn Stone 先生

Carol A.Dahir 先生

(ニューヨーク工科大学)

瀬戸 敦子 先生

(ニュージャージー大学)

平成 17 年 6 月 18 日 (土) に日本学校教育相談学会栃木支部の総会と共に行われた記念講演「アメリカスクールカウンセラー事情」は教育会館 5 階小ホールが満員になる盛況振りでした。講師の先生方は、キャロラインストーン先生、キャロルダヒア先生、瀬戸敦子先生に加え明治学院大学の井上孝代先生という豪華 4 人の先生をお迎えして行われました。講師の先生方は 1 人ずつでも十分に内容の詰まったお話が聞ける方々なので…ちょっと残念！

井上先生がキャロラインストーン先生、キャロルダヒア先生、瀬戸敦子先生の紹介を兼ねてアメリカと日本のスクールカウンセラーの違いについてまとめていただきました。

①内部制と外部制、②各種の専門性とメンタルの専門家、③何をしているかの説明の有無などシステムの違いからくる相違点を簡単に説明し、私達もアメリカのスクールカウンセラーから学ぶべきものは学ぶ必要があることを話されました。この井上先生の話によって 3 人の講師の先生が話されるアメリカのスクールカウンセラーの取り組みが理解しやすくなりました。

始めに瀬戸敦子先生が「ソリューションフォーカスアプローチと学校現場での対応」というテーマで瀬戸先生が学校現場で行っている実践についての講演が始まりました。ソリューションフォーカスアプローチという短期間に実施できる問題解決型のカウンセリングについて事例を交え説明され、クライアントの認知や認識の変化が起こるようにミラクル・クエスチョン (例外を見つける質問) とスケールリング・クエスチョン (本人の目から見た問題の度合いを知るための質問) を使い問題中心の会話から解決中心の会話へと転換していくプロセスやモデル・ステップによる目標を決め改善していく取り組みが話されました。

この瀬戸先生の取り組みは、日頃私達の行っている学校教育相談や学校カウンセリングよりも積

極的に生徒達と関わっている印象を受け、日本の学校現場でもより積極的に短期間に実施できる問題解決型のカウンセリングを展開していく方向性を示してくれたお話でした。

The image shows three overlapping presentation slides from a seminar titled "ソリューションフォーカス アプローチと学校現場での応用 (栃木県カウンセリング協会)".

- Top slide:** Title "ソリューションフォーカス アプローチと学校現場での応用 (栃木県カウンセリング協会)". Speaker: 瀬戸 淳子 (Atsuko Seto), The College of New Jersey, seto@tcnj.edu.
- Middle slide:** Title "スクールカウンセラーが関わること (学内の役割) (主な)".
 - 個人カウンセリング
 - キャリアカウンセリング
 - 大学申請手続き
 - サポートグループ
 - グループカウンセリング
 - 危機介入
 - 授業/科目の選択
 - 保護者との面談
 - 教師とのコンサルテーション
- Right slide:** Title "ソリューションフォーカス アプローチ".
 - 認知/認識の変化
 - 問題中心の会話から解決 (solution) 中心の会話へと転換
 - 個人の長所 (強み) に焦点をおく
 - 生徒と協働で目標をたてる
 - 解決 (solution) を導く例外 (exceptions) を見つける
 - 現在と未来に焦点をおく (Walsh & McGraw, 2002)

続いてキャロルダヒア先生より「学校カウンセリングにおける協働的アプローチ」というテーマでアメリカにおけるコラボレーションである「MEASURE (メジャー)」について話されました。学校におけるカウンセリングの目標やなぜスクールカウンセラーは協働するのか、チーム活動と協働は何を意味しているか、チームや協働とは何かという話からカウンセラーがどの様にして生徒の成功を示す重要なデータを特定し、積極的に影響を及ぼすことができるかを表すメジャーについて説明されました。

Mission	: 学校の方針/目標
Elements	: 要素
Analyze	: 分析
Stakeholders—Unite	: 利益関係者/貢献者
Results	: 結果
Educate	: 教育

グループワークの場合、チームの構成員が1人ひとりで活動する事があるが、コラボレーションではチームでの活動となること、このことは個人のニーズよりもチームのニーズを優先されると話されました。

ダヒア先生のお話では、アメリカのスクールカウンセラーの専門性の高さや学校現場での活動の範囲の広さを感じました。連携ひとつを取ってみても「いつ」、「だれと」、「どのように」連携を取るかだけでなく、学校という組織と地域という社会の接点として生徒達のために活動している事もわかりました。また、カウンセラー自身もケースの内容を把握・分析して次のケースの援助に備えるしっかりしたシステムが構築されている事もわかりました。日本の学校教育相談や学校カウンセリングにおいても学ばなければならない事が多いお話だったと思います。

- ②権利擁護（アドボカシー）
- ③チーム活動／協働
- ④カウンセリング／コーディネーション
- ⑤コンサルテーション
- ⑥資源のマネージメント
- ⑦テクノロジー（技術）
- ⑧アカウントビリティとデータの使用

21世紀のスクールカウンセラーのための
スキル：日本の教育者から学ぶ

栃木県カウ

- ◆ キャロライン ストーン
- ◆ 北フロリダ大学教授
- ◆ アメリカスクールカウ

◆ cstone@unf.edu

エデュケーション トラスト
(Education Trust)

伝統的役割の説明	新しい視点の説明
1 カウンセリング	1 指導力(リーダーシップ)
2 コンサルテーション	2 権利擁護(アドボカシー)
3 コーディネーション	3 チーム活動/協働
(調整)	4 カウンセリング
	5 /コーディネーション
	6 コンサルテーション
	7 資源のマネージメント
	8 テクノロジー (技術)
	9 アカウントビリティとデータの 使用

◆ 行動が伴わなければ、全ての知識はファイルされるだけか廃棄されるものでしかない

私は(知識を)ファイルすることもできないし、廃棄することもできない

MEASURE (メジャー)

- 学校の方針/目標
- 要素
- 分析
- 利益関係者/貢献者
- 結果
- 教育

学校カウンセリングにおける
協働的アプローチ

栃木県カウンセリング協会

2006年6月3日

キャロル ダヒア
カウンセラー教育者
ニューヨーク工科大学
caroldahir@aol.com

学校における
カウンセリング目標

- 生徒の能力向上を支援する
- 生徒の行動を前向きに変化させるよう援助する
- 生徒の社会的・個人的な関係を改善する
- 生徒の対処能力・成功能力を高める
- 生徒に意思決定のプロセスを学び適用できるように教える
- 生徒の新学級への適応の援助、大学選択の援助をおこなう
- スクールカウンセラーの仕事と学校の目標を関連づける

最後にキャロラインストーン先生が「21世紀のスクールカウンセラーのためのスキル」というテーマで講演されました。現在のカウンセラーの仕事は伝統的な仕事（カウンセリング、コンサルテーション、コーディネーション）だけではなく、広範囲に及び積極的な取り組みが必要であると話されました。そして、新しい視点として次の点を挙げられました。

- ①指導力（リーダーシップ）

○ 日本学校教育相談学会第7回夏季ワークショップ

「学校に生かす認知行動療法」に参加して

(福井至先生東京家政大学助教授)

齋藤 誠一郎先生 作新学院高等学校



平成18年8月5日(土)東京家政大学にて9:30から大勢の人が集まり活気がある中、先生が「講義は受け

るだけでは眠くなるので、ロールプレイをやり、皆さんにどんどん参加してもらいたいと思っています。2人一組になってください」との話から始まった。

午前中は不合理な信念（否定的な考え方）を合理的な信念に変化させていく。変容可能な認知と行動に働きかけて不適応を改善していくのが認知行動療法ということ为例や、「JIBT-R」検査を使用し不合理な信念（否定的な考え方）を合理的な信念に変化させていくさまがとてもよく理解できました。

不合理な信念の扱い方で「不合理な信念を持っていても状況がよければ適応していられるので、適応できていればそのままでもよい」が、（～しなきゃダメと考えていて）問題が発生したとき、もし合理的な信念（しょうがない。つぎ頑張ろう）を持っているとストレスに強くなれる」ということに、わかってはいるが改めてそうだと実感した声が多いようでした。

自分のエゴ・ステートを見ていくとどの不合理な信念はどのエゴ・ステートが主に持っていたかがわかり、癒されれば不合理な信念を合理的な信念に変えやすくなる。どんなエゴ・ステートがあると今後楽に生きられるのかなど、今の自分を認めつつよりよく自分を見つめられました。

午後は自動思考の変容の仕方、その自動思考を支持することとしないことを考え、より現実的な自動思考に変容する。人間は同じ刺激に対して異なった感情を持つ。特定の状況が、人間全てに同じ感情を引き起こすわけではない。状況のとらえ方によって感情や行動や生理反応が変わる。などを例題ビデオをみて隣の人を解答をロールプレイし模範ビデオを見ていくのが中心でした。先生曰く「先に模範ビデオを見ると『なんだ、そんなこと』とおもえることが、ロールプレイをやった後で見ると様々な発見がある」とのことでしたが、その通り目からうろこでした。

また、面接や検査において質問事項ごとにカードがあり、結果を話していく上でクライアントとのラポールを維持するために、カードに責任を預けて面接をしていくなどとても興味深いところがありました。

論理的に悩んでいる人に対して、とても有効な手段としてもっと勉強してみたいと思いました。

今回の講座は周囲の人ともロールプレイをすることがあり、とても和やかな雰囲気であり、機会をとらえ、また福井先生の講座を受けたいと思いました。



○ 埼玉大会レポート

「第18回総会・研修大会（埼玉大会）に参加して」

藤浪 直紀先生 作新学院高等学校

東京の板橋にある東京家政大学において第18回総会・研究大会（埼玉大会）が開かれました。夏の強い日差しに加えて、アスファルトからの照り返しでかなり気温が上がっていましたが、主催者・参加者は更に熱い情熱を持って大会に取り組んでいました。（家政大の木陰はとっても風通しがよく気持ち良かったです！）

大会に先立ち、8月5日には研修委員会主催のワークショップが開催されました。Aコース「コラーゲ療法」、Bコース「認知行動療法」、Cコース「コミュニケーション・ワーク」、Dコース「論文の書き方」、Eコース「軽度発達障害児の理解と支援」、Fコース「交流分析」、Gコース「不登校の理解と対応」、Hコース「ピア・サポート・プログラムのマネジメント」の8つのコースが用意されていました。



【ワークショップの風景】

6日には総会が行われ、平成17年度の決算、18年度の予算、名誉会員の推薦案が承認され高橋哲夫（群馬県支部）、甲斐志郎（山梨県支部）、服巻清之（佐賀県支部）、金子保（埼玉県支部）、向後正（千葉県支部）の5名の先生方が『名誉会員』となりました。また、第19回大会（山

形大会とワークショップ) は平成 19 年 7 月 27 日～29 日に行われる事に決まりました。

次に記念講演では、フリーライターの今一生先生が『先生の知らない子どもたち』という演題で我々教師が知らない生徒たちの側面について講演されました。今先生は「完全家出マニュアル」の著者として有名であり、この本を書いた意義について『完全家出=完全自立を目指すものであって、単に家出を勧めている訳ではない。』と話されました。また、取材で知り合ったひきこもりやニートと呼ばれる人達の体験を通して、先生の知らない子どもたち像を参加者に伝えてくれました。

午後からは、「実践事例と研究発表」と「自主シンポとシンポジウム」が平行して行われました。実践事例と研究発表は 5 分科会で 15 テーマの発表が行われました。自主シンポとシンポジウムでは、「虐待を受けた子どもへの支援」をテーマに、シンポジウムは「学校教育相談の役割と責務」をテーマにシンポジウムが行われました。7 日は、「実践事例と研究発表」が 5 分科会で 10 テーマの発表が行われました。

2 日間の研究発表、シンポジウムでは各会場で活発に意見の交換や質疑応答が飛び交う熱い大会でした。

○ 2006.8.6 学校教育相談学会第 18 回埼玉大会

研究・事例発表D分科会

「メール相談を取り入れた学校教育相談の一事例」

作新学院高等学校情報科学部 藤浪直紀先生の発表を拝見・拝聴して

佐藤 幹雄先生 宇都宮海星女子学院中学高等学校

最初に藤浪先生の自己紹介及び作新学院の紹介がありました。藤浪先生がメール相談に着目したのは、いくつかの理由があったようです。

ア 携帯電話はほとんどの生徒が所有していること

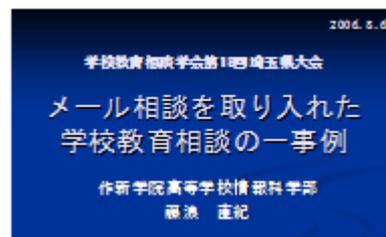
イ 直接声を交わす必要がないため、生徒の緊張が少なく、容易に応答が得られるということ

ウ 相談希望者の孤立感を和らげ、生徒達が興味や関心を示す情報を伝えやすいこと

エ 短文、絵文字などから生徒の気持ちや状況を把握する事が出来ること

などを挙げていました。しかし、なんと言ってもイが重要な要素であると思われます。直接会って話すことが困難な不登校生徒の場合や、あるいは相談員自身が多忙で直接会話が出来ない場合などを考えると非常に有効であることは疑問の余地はないと思います。

しかし、藤浪先生は、携帯でのメールのやりとりが上記のように有用性があり、便利であるからといってすぐに飛びついたわけではありません。極めて慎重にその欠点や危険性などについても熟慮の上に始めたことがわかります。先生は、まず携帯電話でのメール相談の危険性を 5 点挙げています。また、「非音声」というメール相談の最大の特徴の利点を 3 点、欠点を 2 点挙げています。さらには、「匿名性」についても、利点を 1 点と欠点を 4 点挙げています。重ねて、メール相談を実施する時の取り決めを細かくきちんと定めていることが重要だと思います。「時間を決める」「許可なく他人にメールを見せない」「他の人に勝手にアドレス・携番を教えない」等です。文字数も一回 500 字までと制限しています。



以上のように緻密な考察と綿密な配慮がなされた上で始められたことなのだなあと感服せざるを得ません。実際の事例報告に関しても、家庭訪問しても自室に閉じこもったままで会うことができなかつた不登校の生徒が登校できるようになった例などが報告されましたが、驚いたことに相談の結果、失敗と言えるような事例がほとんどないという話でした。それも先生の時間と労力を惜しまない、教育相談、いや教育にかける情熱が成せる業かと、た

だ、ただ敬服するのみという感想でありました。付け加えますれば、参加者の中からの感想にもありましたが、先生ご自身の健康に留意され、くれぐれもオーバーワークにならないようになさって、これからもご活躍なさることを祈るばかりであります。

○ 「栃木県支部事務局から」

日本学校教育相談学会栃木支部事務局 谷津 嘉子

現在、栃木県支部には277名の正会員と28名の支部会員がいます。その事務局に関わらせていただき、3年目になります。4年前に日野先生が学会本部の会長に就任され、その後、丸山先生を中心に栃木支部は10名の理事と2名の監事、そして、事務局で運営されています。

団体支部独自の研修会に加え、他団体との共催事業による年3回の講演会開催、2年に一度の割合で発行されている紀要の編集や支部会報の発行などを行っております。このほかにも本部との事務手続きや群馬、埼玉、山梨、栃木四県合同研修会のお知らせ等、会員の皆様に研修の機会をお知らせしております。

学校教育に関わる外部支援が大幅に増えたことにより、外部機関との連携の機会が増えてまいりました。その影響もあり、最近では学校教育に関わる様々な分野の方々の入会が多くなっております。学校教育を軸とした他の専門機関との連携や、子どものために必要な幅広いリソースを見つけるために、支部研修会等、研修の場が活用されるようになってきていることを実感しています。

このように社会の中での教育相談の需要が増すにつれ、学校カウンセラーの活動の場も広がりつつあるように思います。（*10月の第13回研究発表会での発表は「学校カウンセラー」取得の要件にもなります）

また、会員相互の情報交換と栃木支部からの情報発信として、年2回、5人の編集委員により会報の発行を行い、今回で5号になります。現場の先生という超多忙な立場であるにもかかわらず、藤浪編集長を中心に役割分担され、各編集委員の先生方のスマートな行動には本当に驚かされます。

事務局では会員の皆様の声をより充実した研修会の企画、運営に反映させるとともに、参加された会員の声を会報に掲載させる等、会員相互の交流を大切にして皆様のお役に立てる栃木支部にしていきたいと思っておりますので、是非、ご意見、感想等事務局までお寄せいただければ幸いです。また、本年度は紀要発行の年でもあります。日頃の実践を検証する場としてご活用いただけたらと思います。

今後とも、栃木支部事業にご理解、ご協力をお願いいたします。

○ 栃木支部よりお知らせ

①日本学校教育相談学会栃木支部第13回研究発表会のお知らせ

日時 平成18年10月21日(土) 13:30~16:00

会場 栃木県教育会館3階 大会議室

コメンテーター:毎澤 典子先生

②四県合同研修会のお知らせ

日時 平成18年10月28日(土)・29日(日)

会場 石和温泉 ホテル古柏園

*詳しくは別紙を参照の上、FAXにてお申し込み下さい。

③栃木支部研究紀要第11号の原稿募集のお知らせ

前回ご案内したとおり、本年度は栃木支部研究紀要発行の年でもあります。日頃の実践を発表する良い機会でもありますので、是非、投稿してください。投稿を希望される会員の方は所属、氏名、原稿の題名(概要でかまいません)連絡先を明記の上、栃木事務局までFAXでお申し込み下さい。よろしくお願い致します。

